

第 11 回協働実践研究会報告

2017年2月25日(土)、早稲田大学日本語教育研究センター22号館201・206教室にて第11回協働実践研究会が開催されました。今回は第13回外国語授業実践フォーラムとの合同開催で、参加者は87名でした。プログラムは、ポスター発表が7つ、口頭発表が4つ、パネルセッションが1つという内容でした。

◇ポスター発表 10:30~11:30

<201 教室>

①駒澤千鶴(国際関係学院)・菅田陽平(北京大学大学院生)・朱桂榮(北京外国語大学)

『協働型教師コミュニティー』における活動から得た『学び』とは—ICTの活用を目指して

②中野敦(公益財団法人国際文化フォーラム)・張河林(東京大学大学院生)・張玥(同左)

「保護者が中高生、教職員と共に学ぶ中国語と韓国語教育の実践」

③藤原恵美(早稲田大学大学院生)

「日本語学校の対話型授業の問題点と課題—学習者同士の対話を中心とした実践授業からの考察」

④渡邊晶子(大阪大学大学院生)

「高等学校における中国語アクティブラーニングの導入効果」

<206 教室>

⑤神村初美(首都大学東京)・小原寿美(広島文教女子大学)・奥村匡子(神奈川大学)・野村愛(首都大学東京)・金孝卿(大阪大学)・池田玲子(鳥取大学)

「看護と介護の日本語教師研修に『ケース学習』を用いる試み」

⑥鈴木寿子(早稲田大学)・小浦方理恵(麗澤大学)・唐澤麻里(文化外国語専門学校)

「自律的成長のための教師研修デザイン—対話的問題提起学習とロールレタリングを行った5年間の継続的協働実践」

⑦橋本 愛(九州国際大学)

『ゲームで体験 中華圏での生活』すごろく制作プロジェクト」

ポスター発表では、多様なフィールドにおける実践報告をはじめとする7つの発表がありました。日本語教育のみならずさまざまな外国語教育実践や教師研修に関する発表が行われ、参加者間で活発な議論が行われました。



◇口頭発表① 11:30～12:30

<201 教室>

①中川正臣（目白大学）・亀井みどり（上智大学）・植村麻紀子（神田外語大学）

「多言語の教師が集まる『参加型研究会』をいかに創り出していくか—参加者の声をもとに活動内容を考える」

②能登慶和（獨協医科大学）

「SNS を用いたドイツ語学習の可能性」

<206 教室>

①村元麻衣（名古屋大学）

「マルチメディアを使ったドイツ語授業」

②岩崎浩与司（早稲田大学）

「遠隔対話の場はどのように作られるか—参加者間の働きかけに着目して」

201 教室では、まず、中川氏他によるご発表では、「多言語の教師が集まる『参加型研究会』をいかに創り出していくか—参加者の声をもとに活動内容を考える-」という題目の下、研究会をいかに「参加型」にできるかについての考察が、参加者アンケートの分析を通じてなされました。質疑応答では、研究会を「参加型」にしようとするときの困難点や工夫に関して活発な意見交換が行われました。聴衆からの提案として、ICT を活用するなどした様々な参加・コミュニケーション形態を導入する、可能な範囲、可能な形での参加や周縁的参加を認めるなどが挙げられました。

次に、能登氏によるご発表では、「SNS を用いたドイツ語学習の可能性」という題目で、LINE を活用した教室外での他者およびドイツ語話者とのつながり強化、自律学習の促進を目指し、ドイツ語のオリジナルスタンプ制作を高校のドイツ語授業に取り入れた実践報告がありました。質疑応答では、他者とのコミュニケーションに関する質問が中心に寄せられました。能登氏からは、自ら発信する力をコミュニケーション能力として捉え、その育成状況の測定を今後の課題としていくことが示されました。

206 教室では、まず、村元氏により「マルチメディアを使ったドイツ語授業」についてご発表がありました。4つのマルチメディアのプログラムを大学のドイツ語授業に用いた場合の実践例や学習者の授業内の反応、そして学生からの授業後のコメントが報告されました。分析の結果、マルチメディアを用いた授業に時には遊び的要素もうまく組み合わせることで内発的動機づけを強化すること、その過程の中で学生同士が能動的に楽しく関わり合い、別の世界との接点を自律的に見つけ出すことなどが示唆されました。聴衆からは、外国語授業の動機付けの維持、マルチメディアの具体的な使用方法、そして大学から指定されたテキストとマルチメディア教材の関連性の有無などについて質問がありました。ドイツ語教育以外の外国語教育にも、当該マルチメディアを導入することが可能であることがわかりました。

次に、岩崎氏により「遠隔対話の場はどのように作られるか—参加者間の働きかけに着目して—」と題したご発表がありました。参加者 5 名（日本語母語話者 1 名を含む）間の「働きかけ」に着目し、Web システムによる遠隔対話の場がどのように作られるのかについて分析した結果、12 のコードと 4 つのカテゴリが生成されたことなどが示されました。質疑応答では、遠隔で行う

場合とそうでない場合（会社の対面で行われる会議）では、働きかけがどのように異なるのかという質問がありました。さらに、参加のカギとなる自己開示を参加者がしない、あるいはしたがらない時は、どのようなファシリテーションが有効か、といった質問がありました。岩崎氏の発表を通じて、遠隔教育の特徴をフロアも一緒に考える機会になりました。



◇昼休み：発表者との「お昼の語り場」 12:30～14:00

昼休みには「お昼の語り場」と題し、カジュアルな雰囲気の中で発表者と質疑応答や意見交換ができる時間が設けられました。ポスターを見る時間が足りなかったという方や、ほかの発表を聞く時間がなかったという発表者の方からも、発表内容について改めて確認する場が得られたとして好評でした。



◇合同企画パネルディスカッション 14:00～16:30

「学習者・教師の多様性を活かした学習環境のデザインー「協働」をテーマとした言語教育の環境整備を考えるー」

パネリスト：山下誠（神奈川県立鶴見総合高等学校）・野澤督（慶應義塾大学） 本郷智子（東京農工大学）・金孝卿（大阪大学）

◇まとめ・諸連絡・閉会のあいさつ 16:30～17:30

後半は「学習者・教師の多様性を活かした学習環境のデザインー「協働」をテーマとした言語教育の環境整備を考えるー」というテーマで合同企画のパネルディスカッションが行われました。

まず、山下氏からは、母語の異なる生徒らが在籍するクラスにおける韓国朝鮮語授業について紹介されました。言語の運用力を養うことにとどまらず、言語に対する理解や関心を高め、多様な文化を受け入れ、多様な人々と協働していく姿勢と能力を育てるための工夫と生徒たちの学びの様子が示されました。次に、野澤氏からは、大学における基盤科目としてのフランス語教育に

における「教科書を用いない授業」の試みが紹介されました。これまでのフランス語運用能力の養成に偏っていた授業への反省から、フランス語を介する（異）文化教育や人間教育に根ざした教育の実践を目指し、学生の関心やニーズから出発したテーマ選びと、それに基づき複数の教員が協働で行った実践が紹介されました。また、本郷氏からは、アカデミック社会のグローバル化が加速化し、相手、トピック、場面等によって使用することばが混在する現状を鑑み、理系の大学院留学生が言語のみならず、あらゆる資源を活用することを支援する授業活動が紹介されました。学習者データから、留学生が自分の専門について日本語で説明する場合、単に言語を置き換える手法を取るだけでなく、多様な資源を協働的に活用することで、より深い理解に基づく内容や表現を生み出していけることが示されました。最後に、金氏からは、大学院共通教育科目におけるビジネスコミュニケーションのためのケース学習の実践が紹介されました。複数の共通言語が使えるよう工夫することで学生の対等な参加を可能にできたこと、学生自身の問題を取り上げ、対話と内省のプロセスを経ることによって、文化的背景やそれまでの経験、それぞれの問題解決の方法の違いなどが学生双方の学びに深く関わった可能性が示されました。

全体討論では、1) 自分の教室の中の多様性のとらえ方（レベル、文化的背景の違いなど）、2) 多様性の状況はどのように生かせるか（協働との関係）、の2点についてパネリスト間でディスカッションを行いました。多様性のとらえ方では、「目標を適切に設定すれば多様性が生きてくる」（野澤氏）、「教師の存在意義は、（学習者間の）あらゆる差やギャップを（資源として）使いきることにある」（山下氏）、「教室における偶発性を利用することで、多様性を有効化」（本郷氏）、「博士か修士か、文系か理系か、といった成熟度、専門性の多様性も活動の展開に大きく貢献する」（金氏）といった意見が出されました。また、多様性の活かし方では、「ライブ感を楽しむことは大事だが、教師の中に葛藤や不安もあり、難しさがある」（金）、「教師が決めた内容をこなすのではなく、その場その場で次の課題ややるべきことが生まれてくるタイプの授業で、大変さを楽しめるかどうかのカギ」（野澤）、「多様性の利用の仕方でもうにでもなるのだ、というマインド、どのような現場でも学力差やモチベーションの差があり、マイナスをプラスに転じることはできるという信念や確信を持つことが大事」（山下）など、ファシリテーターとしての役割を果たす教師にとって重要な視点やスタンスに関する議論が展開しました。

続いて、フロアでも近くに座っている人同士で意見交換する時間をとり、考えを深めていただきました。質疑応答では、さまざまな現場での実践をふまえた質問やコメントが出され、充実したセッションとなりました。たとえば、多くの外国人生徒を受け入れている高校で必要となる教科学習のケアができていない中、どのように多様性に対応していけばいいのか、他者に対する寛容性の欠如を目の当たりにすることが多くなっている現実社会で学習者が生きていくには、教育の場が「多様性を認める」というところにとどまっていればいいのか、といった問題提起がなされました。このような問いに対する「正解」はないが、少なくとも、みんな違ってみんないい、というのがゴールではないこと、それぞれの現場の制約の中で改善に向けた方策を探るうえで、今回の研究会のような実践者間の課題共有と協働の場が重要であることを確認しました。



研究会終了後、18:00からは早稲田大学 22 号館 3 階ラウンジ (WILL) にて、40 名の参加者による懇親会が行われました。協働実践研究会・外国語授業実践フォーラムそれぞれの会員の方、また非会員の方にもたくさんお越しいただき、飲み物を片手に談笑しながら楽しく交流する機会となりました。

研究会の合同開催は初の試みでしたが、発表や議論のみならず、会の準備や運営に関しても学ぶところの多い一日でした。開催にあたりまして多大なるご協力をいただきました外国語授業実践フォーラムの皆様には感謝申し上げますとともに、またこのような機会が設けられることを期待しております。

今回の研究会・懇親会にご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

文責：岩田夏穂・金孝卿・近藤彩・トンプソン美恵子・古賀万紀子